

人柱伝説

元禄十六年の申の年、下早と中津の渡し場の中間あたりに堤防があった。その堤防が台風と大雨のため決壊してしまった。

地元の人々は、堤防修理に努めたけれども、水がどうしても止まらなかった。そのため当時の庄屋さんが、

「私故人柱に立つ」

と言った。そして庄屋さんが人柱に立つことになったけれども、その奥さんが、

「あなたがここに人柱に立つてもらえば、後を治める人が誰もおらん。だから、私があなたの代わりに立ちます」

と言った。

そして、奥さんが人柱に立った。すると、不思議にも水は止まった。村の人々は庄屋の奥さんに感謝した。村人の一人が、

「こりやどうしても、その人のために毎年供養をしてやらんといかん」

と言った。村の人々は、供養することに賛成した。

村の人々は、下早の土居の曲がったところに石の祠を祭り、その側に榎の木を植えて八龍大明神さまを祭った。

村の人々は、庄屋さんのおかげで毎年、米も豊作になった。

それから、八龍大明神という旗と、志賀大明神という旗を掲げて戦いに行くと、負けたことがなかった。

(下早 古賀八郎)

八民謡

民謡は民衆の共同生活の中で生まれたもので、特定の作曲・作詞者の個性的な創作意識は問題とならない。従って作者の名も明らかにすることはできないものである(『神話伝説辞典』)。民謡の歌詞の中に地方的、風土的な要素が巧みに表現されている。

町内で採集した民謡を分類すると、次のとおりである。

仕事唄―田植唄(田の草取り唄)・木びき唄・棉もり唄・ワラスボ取り唄

祝儀唄―浮立唄・相撲甚句・長持唄・かまぶた被せ唄・嫁さん茶講唄・お祝いの唄・まだらの唄・もぐら打ち

唄・七福神の唄

座敷唄―犬井道名所・呉服のみなどの唄・犬井道の唄・大詫間の唄・大正擲の唄・スットン節・ヨイシヨ

節・セメント会社・端唄・トンボの目・チヨイチヨイナ

わらべ唄―手まり唄・お手玉唄・お月さん幾つ・お月さん・羽根つき唄・セッセ・尻取り唄・七夕唄・草履隠

し唄・今日は日のよか・かごめ唄・ばあつきや唄・数え唄・井戸のつるべ唄・子守り唄

町内の代表的な民謡と思われるのを記す。

棉もり唄（仕事唄）

へう籠手に持ち 出て来るは
犬井道へんの 洒落女
三幅の前だれ 腰に巻き
赤い帯をば ぐつとしめ
白地の手拭 頬かぶり
姐さん何処へと 聞うたらば
私や新搦の 棉もりに
千代・八千代 どうした縁じゃるか
コラコラ

（野村 竹下サカ）

相撲甚句（祝儀唄）

へアーエー トコドスコイドスコイ
娘十七、八や嫁入り盛りよ
トコドスコイドスコイ

アー箆筒長持・鉄箱 これほどしこんでやるからにや
二度と帰るなこりや娘 何を言わんす父さんよ
東がくらめば風とやら 西がくらめば雨とやら
千石積んだる船でさえ 向こう嵐ときたならば
もとの港にや コラサノサ

（野村 高森アヤ）

嫁さん茶講唄（祝儀唄）

へさらりと受けて（オイオーイ）かげ見れば
四方や四面に 倉を建て
万福長者と 祝います

盃の台の周りに（オイオーイ）葦植えて
根もよし 葉もよし 枝もよし
こなたの花嫁さんは 心よし

犬井道名所（座敷唄）

へ犬井道源太夫橋や 名高い橋よ

アードッコイショー 行たてみなされ
こーりやよろけ橋よ チョイナチョイナ

私や犬井道の 百姓の娘よ アードッコイショー
空にひばりの 鳴く声聞けば
何で百姓が やめられりよか あと歌いながらも
こーりや鋏を取るよ チョイナチョイナ

私や犬井道の 漁師の娘よ アードッコイショー
空にひばりの 鳴く声聞けば
何で漁師が やめられりよか あと歌いながらも
こーりや舵をとるよ チョイナチョイナ

私や犬井道の 桶屋の娘 アードッコイショー

三国一の（オイオーイ）花嫁は
嫁に花とは なけれども
心よければ 花じゃもの

（倉床 野中マツノ）

もぐら打ち唄（祝儀唄）

へしょうよんどん しょうよんどん
包丁貸しやい 茶飲みやい
夜さや嫁御とつて 入こみやい 入こみやい
なーれなーれ 梨の木
ならずの梨をば なれとぞ祝うた
千なれ万なれ 億万なーれ
人のちぎつときや 堀の真中なーれ
俺がちぎつときや 畑の真中なーれ
十四日のもぐら打ち
オカチンなよごうでも 太かとおくくさい

（新町 糸山サノ）

足でからめて 手でしめて そこじゃそこじゃと
尻叩くよ アーチヨイナチヨイナ

(呉服 内田トモエ)

手まり唄(わらべ唄)

へいちもんめのぶどうに おかたんさーれんかん
かたろうばってん お母さんからやけらるつ

お母さんな納戸に 着物作いぎやあ

着物どまつん破って アーンとならした

お父さんは座敷に 障子張ぎや

障子どまつん破って アーンとならした

(北早 江頭登志子)

お月さん幾つ(わらべ唄)

へお月さん幾ら 十三、七つ 七つの年から

油買ややられて、犬から追われて

橋の下やかごうで 屁はプツプツ

(佐房 境 ツナ)

子守り唄(わらべ唄)

へしつちよこはつちよこ 蜂の巢

蜂や山やあ 巢作いぎや

巢は作らじ 嫁御見ぎや

隣の嫁御は 良か嫁御

紅つけ鉄漿つけ 良か女

早う寝た者にや 白餅に

砂糖つけて 食わすつぱん 食わすつぱん

遅う寝た者にやあ 団子いっちよに

味噌つけて 食わすつぱん 食わすつぱん

(鹿江 石井フミ)

九 芸 能

(一) 浮 立

町内における芸能は浮立大神楽、俗にいう浮立の伝承である。かつては「鹿江の浮立が行かんば、お下りのでけん」と言われていた浮立の伝承も姿を消し、それが現存するのは大詫間と犬井道だけになった。浮立は、大詫間の松枝神社で催される十月二十二日の供日、犬井道の海童神社(じいおうさん)で催される十月二十三、二十四日の供日に奉納されている。昔は早津江、唖分、小々森、波佐古などにも伝承されていた。

『広報かわそえ』(No.二四六 昭和五十一年九月二十五日発行)に、竹下日出次氏は「浮立大神楽とは(上)と題して、

「面浮立の起源については、伝えられるところによれば、享祿三年当時、佐賀の豪族龍造寺家兼が大宰少弐冬尚をたすけ、中国大門勢の軍を佐賀県神埼郡田手村に迎えた時に、危うく破られんとしたが、その折、当時佐賀本庄村の郷士鍋島平右衛門清久がおのおの赤熊の面をかぶった一族郎党百餘騎を指揮し、敵陣に乱入して奮戦、これを撃退した。その勝ち祝いの踊りが面浮立の始まりだ。」

と、「浮立大神楽玄蕃流儀口傳書」について述べている。しかし、これは伝説として受けとるべきである。後